THE JOURNAL OF

JAPANESE HISTORY OF PHARMACY

薬史學雜誌

Vol. 7, No. 1•2 (合冊) 1972

— 目　　次 —

和漢薬の本草学的研究（第3報）

中国産続断，大薊および小薊について……難波 恒雄，久保 道徳……1～14

Historicel and Herbological Studies on The Traditional Japanese and Chinese Crude Drugs "Hsiituan", "Tachi" and "Hsiaochi" from China.

Tsuneo Namba, Michinori Kubo.

茶の薬用について……赤　松　金　芳……15～18

On Application for medicinol Purposes of the Tea.

Kaneyoshi Akamatsu.

会務報告……19～20

THE JAPANESE SOCIETY OF HISTORY OF PHARMACY

Nihon University, Pharmaceutical Institute,
Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

薬史学誌
J. His. Pharm.

日本薬史学会

第三版食品添加物公定書解説書

京都大学名誉教授　刈米達夫　監修　＜近　刊＞

食品添加物公定書は今回大巾に改正され第三版として公布されることになりました．収載品目は，現在わが国で指定されている食品添加物340品目であります．本解説書は公定書に収載された規格・試験法についての詳細な〔注〕と，収載食品添加物に対する〔解説〕を加えたものであります．

本書の特長とするところは，規格，試験法についての詳細な〔注〕に止まらず，特に解説において食品中の添加物の分析(法)，代謝，および毒性の項を設け詳細かつ具体的な説明を加えたことであります．

食品中の分析の項ではしばしば問題となっている保存料，殺菌料，着色料などの分離，抽出，定量法について最新の文献を網羅し詳細に記述されております．また併せて製剤中の分析についても詳述しました．

代謝の項では，消化管からの吸収，体内分布および排泄などの動態がその代謝物をふくめて的確に把握できるよう解説が加えられています．

毒性の項では急性，亜急性および慢性毒性に分類して記述されているほか，最近とみに重視されるようになった食品添加物の催奇形性ならびに次世代に及ぼす影響を観察した繁殖試験の結果についても集録されていて代謝とともに毒性の種差も明らかにできるのが特長であります．執筆者は食品添加物公定書の改正に直接携わられた第一線の専門家と医学，薬学，農学の権威者による綿密な検討を経て詳述されており，その内容は実際的かつ的確なものであります．

R. S. WEISER : FUNDAMENTALS OF IMMUNOLOGY

ウィーザー 免疫学入門

松橋直・大谷杉士　訳　　4,800円

免疫学は医学の分野ばかりでなく，獣医学，動物学，植物学，生物化学など，生物学のいずれの分野でもその知識と技術が要望されるほど基礎的な学問となってきている．本書はその点を十分に考慮して，医学部および関連学部の学生や若い研究者が，免疫学に興味を持ち，基礎的な知識を体得して，医学・生物学のさまざまな現象を免疫学の立場から理解し，研究を始める手掛りがえられるように意図された「免疫学への入門書」である．

世界の民間薬

刈米達夫　著　　2,800円

民間薬は世界各地の民族が何千年にもわたる経験により薬効を知られ言い伝えられたもので，これらの中から現代の医学に用いられている薬物も沢山出ている．世界の民間薬を全部集録すれば数限りないから，本書にはかって英米独仏露その他の薬局方などに収載されて権威づけられた民間薬230種を集録し原植物，薬効，成分，エピソードなどを通読に便利なように簡明に記載し，原色写真24枚及び単色写真58枚を加えてある．

化学と薬学の教室

新鮮な内容・やさしい解説

1月，5月，9月，11月発行　350円

本誌は化学・薬学を専攻する学生の課外の読み物として，講義や専門書では短時日にまた十分に習得できない新しい広範な知識を自然と身につけさせることを意図して刊行された．新しいこと，基礎的なことを初歩の者にも理解できるようにわかりやすく解説し，通学の途上や睡眠前のひとときにも気軽く読めるように編集してある．

第1号～38号好評発売中．／　この雑誌だけは，第1号よりおそろえ下さい．系統的に学べるように編集されております．既刊の号は第1号より常に用意してご注文をお待ちしております．

株式会社 廣川書店

113-91 東京都文京区本郷局私書箱38号
振替 東京80591番・電話 (815) 3651

和漢薬の本草学的研究（第3報）
中国産続断、大薊および小薊について[1)]

難 波 恒 雄[1a)], 久 保 道 徳[1b)]*

Historical and Herbological* Studies on the Traditional Japanese and Chinese Crude Drugs (3) "Hsütuan", "Tachi" and "Hsiaochi" from China

Tsuneo NAMBA[2a)] and Michinori KUBO[2b)]
Research Institute for WAKAN-YAKU, *University of Toyama*[2a)] and *Faculty of Pharmacy, Kinki University*[2b)]

Summary

Chinese crude daug "Hsütuan (Xuduan) 続断" is listed in Shên-nung-pên-ts'ao-ching 神農本草経 as the remedy for many diseases, such as fracture, contusion, low back pain, tumour pain and difficult delivery, and the prescriptions of Hsütuan are also included in many Chinese medical books.

Considering the descriptions in many herbals (Pên-ts'ao-shu 本草書), the origin of Hsütuan reported by Su-ching 蘇敬, Han-pao-shêng 韓保昇 and Su-sung 蘇頌 is regarded as *Dipsacus asper* WALL. of *Dipsacaceae*. At present, crude drug Hsütuan from China has been confirmed as the root of this plant, and therefore, the proper goods named Hsütuan has been believed to be *Dipsacus asper* WALL.. But, the line drawing of Yüehchou-Hsütuan 越州続断 appeared in Chêng-lei-pên-ts'ao 証類本草 definitely shows *Cirsium* plant of *Compositae*, this is also a kind of Hsütuan.

Chinese crude drugs "Tachi (Daji) 大薊" and "Hsiaochi (Xiaoji) 小薊" are listed in Ming-i-pieh-lu 名医別録 as the remedy for hematemesis, nasal bleeding, fracture, contusion, suppurative diseases and women's diseases. These medical effects show a close resemblance to those of Hsütuan.

The origins of Tachi and Hsiaochi vary by the historical and regional conditions as Table I. But, considering the drawing and description in herbals, the proper crude drugs of Tachi and Hsiaochi are originated from *Cirsium* and *Breea* plants of *Compositae*. And both plants have been prescribed for same medical effects.

（I）続断の基源植物の混乱について

続断は神農本草経[3)]の上品には「味苦，微温，主傷寒，補不足，金瘡，䯒傷，折跌，続筋骨，婦人乳難，久服益気力」，名医別録[3)]には「崩中，漏血，金瘡，血内漏，止痛，生肌肉及跛傷悪血，腰痛，関節緩急」と記載され，古くから強壮および外傷，化膿性疾患，打撲，筋骨の折傷，腰痛，関節炎，難産[4)]，月経不順などの治療薬とされていた．

続断の基源に関しては，歴代本草書に数種の植物があげられているが，今日中国で用いられている続断およびわが国への輸入品続断の基源は既に報告[5)]したごとく *Dipsacaceae* の *Dipsacns asper* WALL. の根である．このものは中葯志[6)]および中華人民共和国葯典[7)]に正常品の一つにあげられているもので，以下に論述

*）富山大学薬学部和漢薬研究施設[2a)]，近畿大学薬学部[2b)]

1）第2報，薬史学雑誌，5(2), 1～12 (1970) 本報は"漢薬・続断の生薬学的研究"，生薬学雑誌，25(2)，65～73 (1971) の続報である．

2）Location : a) *Gofuhu*, *Toyama*, b) *Kowakae*, *Higashiosaka*

*）欧米では中国の本草に対する言葉としてHerbalがあるが，学問的体系が確立されていないため，本草学という言葉はない．欧米における本草学は薬物学と同義語とされ古くは Pharmacology であったが，現在の時点では内容が異なってきた．そこで本草学として"**Herbology**"という言葉を提唱する．

3）唐慎微，"重修政和経史証類備用本草"，人民衛生出版社影印本，第1版，北京，1957．続断：7巻，p. 181，大小薊：9巻，p. 221.

するごとく続断の古来の正常品もこのものであろうと思われる．続断という生薬名は薬効上からつけられた名称で，筋骨の折傷などに用いられているものが，しばしば続断と称され，古来異物同名品が多い．たとえば梁の陶隠居[3]は当時の市場品について次の3種の続断をあげている．一つは「節節断皮，黄皺状，雞脚者又呼為桑上寄生」というもので，このものは *Loranthaceae* の *Loranthns* 属または *Viscnm* 属植物であろうと思われる．今一つは「接骨樹，高丈余許，葉似蒴藋」というもので，このものは *Caprifoliaceae* の *Sambucus* 属植物と推測され，これらはともに筋骨の折傷などに用いられていた．あとの一つは広州で用いられているもので「一藤名続断[8]，一名諾藤，断基茎器承其汁飲之，療虚損，絶傷，用沐頭又長髪，折枝挿地」というものであり，このものは基源不明である．陶隠居[3]はこれらはいずれも真物でないと云っている．その他別名に続断という名称が使われているものとして神農本草経[3]に「石龍芻…一名草続断」というものがあり，リュウマチなどの治療薬とされている．また本草綱目拾遺[12]には「建蘭花…根：土続断[13]」があげられ，打撲症に用いている．

また続断は古くから薊類生薬（*Compositae* の *Cirsium* 属植物およびその近縁種を基源とする生薬類）と混乱して用いられていた．魏の李当之[3]は「虎薊」のことだといい，晉の范汪方[3]には「続断即是馬薊，与小薊葉相似，但大於小薊爾，葉似旁翁菜而小厚，両辺有刺刺人，其花紫色（続断は馬薊のことであり，小薊葉に似ているが，小薊よりも大きい，葉は旁翁菜に似て小さく厚く，両辺に刺針があって人を刺す，花は紫色）」とあり，このものについて北宋の蘇頌[3]は今越州生者相類」と述べている．越州は今の浙江省紹興県附近にあたり[14]，大観本草[10]，政和本草[3]，紹興本草[15]にあげられた「越州続断」の図（Fig. 1-C）は頭上花の総苞片が鐘状で，茎に刺針がみられ，葉は茎を抱き，羽状に切れこみ，根出葉が花時に残存し，太い根が多く散出していることから *Cirsium* 属植物中 *Cirsium japonicum* DC. の形態に極めて類似したものであろうと思われるが，中国には本植物が分布しないことになっている[16]ので，その近縁種とすべきであろう．また范汪方に「続断即是馬薊」と云っているが，唐の外台秘要[17]に淋疾の治療法の一つに「取生続断絞汁一升服之」とあり，大観本草，政和本草にはこれには「馬薊根」があたると注釈している．日華子本草[3]には続断の別名に「大薊」があげられ，いずれも続断の1種に *Cirsium* 属植物およびその近縁種が用いられていた．

これとは逆に「大薊」と称されるものにその基源が *Dipsacus* 属植物と思われるものがある．清の植物名実図考[18]の「大薊」の一つがそれである．本書には「大薊」として2図（Fig. 12-B, C）があげられ，一つ（Fig. 12-B）は明らかに *Cirsinm* 属植物であるが，一つは「医書相承，多以続断為即大薊根．今江西，南贛産者根較肥，土医呼為土人参，或以欺人，其即鄭樵所云南続断耶」と云っているもので，図（Fig. 12-C）は肥大根が散出，根出葉が羽状深裂し，このものは明らかに *Dipsacus asper* WALL. の幼苗と合致する．

大薊に関しては名医別録[3]の中品に「大小繁根味甘温，主養精保血，大薊主女子赤白沃，安胎，止吐血，衄血，令人肥健」とあり，今日でも大薊，小薊または大小薊の名で出血性諸疾患などの治療薬として頻用されているが，本草では外傷，打撲，化膿性疾患，婦人疾患などの治療にも用いられ，続断の薬効と共通した点が多く，清の楊時泰[19]は「大薊与続断茎葉有別，功用相近」と指適している．それゆえ *Cirsium* 属植物が続断の同効代用品的に使用されていたためにこのような混乱が生じたのであろうと思われる．しかし唐の千金要方[20]には月経不順やこしけに用いられる処方中に「続断」と「小薊根」の2品が同時に配剤されている例もあり，当時は両者を区別して使っていたのであろうが，それらの基源は現在不明であり，混乱はその以後にも続いている．

4）「矢数道明，漢方の臨床，19(1)，26(1972)．神農本草経の乳難と産難」の中で乳難は難産のことであると解釈しており，われわれもこの意見をとる．

5）難波恒雄，久保道徳，生薬学雑誌，25(2)，65～73（1971）．

6）中国医学科学院薬物研究所等編，"中薬志"，人民衛生出版社，北京，1959．続断：第1冊，pp. 528～532，大薊：第3冊，pp. 1～5，小薊：第3冊，pp. 6～14．

7）中華人民共和国衛生部薬典委員会編，"中華人民共和国薬典1963年版一部"，人民衛生出版社，北京，1964．続断：p. 260，小薊：pp. 21～22．

8）本草経集注[9]，大観本草[10]，政和本草[3]ではこのようになっているが，本草綱目[11]では「一名続断藤」と変更している．

9）陶弘景，"本草経集注"，影印版，南大阪印刷センター，大阪，1972．p. 64．

10）唐慎微，"経史証類大観本草"，光緒甲辰武昌柯氏重校版，復刻版，広川書店，東京，1970．続断：7巻，pp. 186～187，大小薊：9巻，pp. 245～246．

11）李時珍，"本草綱目"，続断，大小薊：巻15，重

〔II〕続断の基源植物に関する歴史的考察

前記のごとく陶隠居[3]は3種の続断をあげ，すべて真物でないと云っているが，真物の続断については記していない．唐初期に蘇敬[8]は当時の正常品について「葉似苧而茎方，根如大薊黄白色（葉は苧に似ており，茎は四角形で，根は大薊の如くで黄白色）」といい，さらに北宋の韓保昇[3]は「葉似苧茎方両葉対，花紅白色，根如大薊，一株有五六枝（葉は苧に似ており，茎は四角形で，葉が対生し，花は紅白色，根は大薊の如くで，一株に五六本の茎がある）」といい，蘇頌[3]は「三月巳後生苗，莖四稜似苧麻葉亦類之両両相対而生四月開花紅白色似益母花，根如大薊赤黄色七月八月採（三月以後に苗が生え，莖は四稜で苧麻に似，葉もまたこれに類して対生し，四月に益母花に似た紅白色の花が開き，根は大薊のようで，外面赤黄色で，七月八月に採集する）」と詳述し，証類本草にあげられた「絳州続断[21]」の図（Fig. 1-B）がこれらの記文と合致する．これらの基源に関して江戸時代の松岡玄達[22]は，本草和名[23]にしるされた「続断：和名波美，一名拎尓乃也加良」や延喜式[24]の「和名考異」に誌された「続断：也末阿佐美」などをあらためて「真ノ続断ハ今ノヲドリ草ノ根ナリ証類本草ニ出ス方茎麻葉ノ者是ナリ，漢土ヨリ来ルハ皆大薊根（ヤマアザミ）ナリ．二物ノ之根相似タリ但続断ハ根細，小薊根ハ長大，岐多シ．故ニ鬻者ハ薊根ヲ以テ之ニ偽ルナリ」と云っている．確かに *Lamium album* L. var. *barbatum* (SIEB. et ZUCC.) FRANCH. et SAVAT. オドリコソウは玄達の云うごとく証類本草の記文とほゞ符合し，その後この説が通説となった．小野蘭山[25]もこの説を採用し，「オドリコソウ…是川続断ナリ，舶来ノ者ハ根皆大ナリ是南続断ナリ，其形略薊（アザミ）根ニ似タルモアリ，故ニ本邦ニテ薊根ヲトリ売者アリ」と述べているが，しかし「舶来ノ中ニ茎ヲ連ルモノアルヲ見ニ方ニシテ対生スルトキハ薊類ニ非ズ」と疑問視している．また石戸谷[26]は蘇敬，韓保昇，蘇頌の説は *Labiatae* の *Phlomis maximowiczii* REGEL オオバキセワタおよび *Lamium album* L. にあたると述べ，大連および朝鮮では *Phlonis maximowiczii* の根が用いられているとし[27],[28]宗定[29]もその生薬学的研究を行ない朝鮮市場品は本種であると報告している．中薬志[6]にも四川省の一地域で本種の根を続断としていると記している．

しかし，蘇敬，韓保昇，蘇頌などが本草に記載した「茎や葉が苧麻に似ており，茎が四稜で，葉が対生し，花が紅白色，根が大薊の如くである」という続断は現在中国で正常品にされている *Dipsacus asper* WALL. の形態に類似し，今日香港市場品およびわが国への輸入品続断もわれわれが証明した[1]ごとく，本種であるので，本草記載の続断は *Dipsacns asper* WALL. をあてるのが妥当であると考える．すなわち本種の植物形態は茎に稜があり，葉が対生で，羽状に3裂し，白色の頭状花序をつけ，根茎がわずかに横走し，数本の茎が認められ，根が茶かっ色で *Cirsium* 属植物と類似しており，明らかに本草の記文と合致する．

続断の産地に関しては，范子計然[30]に三輔（陝西省中部）に出ずるとあり，広州記[30]には鄣平県（広西省の境）に出ずるとあり，扁鵲[30]は梁州（陝西省の漢中道および四川省）に生ずると云っている．名医別録[3]には常山（浙江省常山県）に生ずるとあり，蘇頌は興元府（陝西省南鄭県），舒州（安徽省潛山県），越州（浙江省紹興県），晉州（山西省臨汾県）にあると述べている．*Dipsacus asper* WALL. の分布はインド，ネパール，中国の中部，南西部の 1000～2000m にかけて普通であり[31],[32]，絳州，三輔，鄣平県，梁州，陝西，河中，興元府，舒州などはこの分布域に入る．

証類本草にあげられている「晉州続断」の図（Fig. 1-A）は根が単一長円錐状で，横皺が明瞭で，*Dipsacus*

刻本草綱目附図，32丁，

12) 趙学敏，"本草綱目拾遺"，7巻，清光緒張紹棠刻本，商務印書館，香港，1954，p. 287

13) このものは「物理小識」に「都梁蘭根名土続断」とあるものと同じであると云っている．

14) 産地考証についてはすべて謝寿昌等，"中国古今地名大辞典" 商務印書館，上海，1933．および青山定雄，"中国歴代地名大要覧"，大安影印本，東京，1965．によった．

15) 唐慎微，"紹興校定経史証類備急本草"，龍谷大学図書館蔵，春陽堂刊，東京，1971．続断：巻8上，小薊：巻10上．

16) SIRO KITAMURA, Compositae Japonicae, Memoirs of the College of Science, Kyoto University, Series B, 13. 1937. pp. 64～66.

17) 王燾，"外台秘要"，巻27，国立中国医薬研究所版，台北，1964，p. 729．ほか，

18) 呉其濬，"植物名実図考"，中華書局，北京，1963．続断：巻14，p. 268. 大小薊：巻11，pp. 291～293

19) 楊時泰輯，"本草述鉤元"，9巻，科技衛生出版社，1958，p. 225.

20) 孫思邈，"備急千金要方"，4巻，国立中国医薬研究所版，台北，1954，p. 66～67.

21) 絳州は今の山西省新絳縣．

22) 松岡玄達，"用薬須知"，巻之2，岡村彌兵衛，唐本屋八郎兵衛梓行，京都，1726，19丁．

23) 深根輔仁，"本草和名"，上巻，寛政版（1797年），

japonicus MIQ. の形状に近似し，本種は中国南東部に分布し，植物分域上からも符合する．本草綱目[11]の附図の続断の図（Fig. 3）はこの晋州続断に似せて書かれたものであろう．なお *Dipsacus japonicus* は中葯志[6]に正常品の一つにあげられており，河南，江西，広東，広西省等でわずかに産出されている．また実用中葯手冊[33]の続断は本種があげられ，慢性関節リュウマチ，打撲，筋肉痛，腰痛などに用いられている．しかし，現在市販されている香港およびわが国への輸入品には本種を基源とする生薬はない．

明の本草品彙精要[34]には「蜀川者佳，根脂潤肥大者為好，類玄参而黄皺，色赤黄，主続筋骨（四川省産のものがよく，根が脂潤し，肥大したものがよく，その形状は玄参に類似し，黄皺のあるもので，色は赤黄色，筋骨の接続に用いる）」と記載されている．本草蒙筌[35]にも「陜蜀最盛三月纔生，似苧麻葉，苗幹四稜，類大薊根，皮色黄赤，資之入薬，取根於秋，多有塵良務択精細，但認状如鶏脚者為上，節節断皮黄皺者方真，去向裏硬筋，以醇酒浸宿（河南省や四川省に多くあり，三月にわずかに生じ，苧麻葉に似，茎は四稜で，大薊根に類似し，表面は黄赤色，薬用にするには秋に根を採集し，多く麓のものが良く，よく選べ，鶏脚状のものが上等品で，節々を切断し，表面に黄色の皺のあるものが真物である．内側の硬いところを去り，丸一日濃くてよい酒に漬けよ）」と記載している．これらは明らかに *Dipsacus asper* WALL. を指したものであろう．確かに *Dipsacus asper* を基源とする続断は，*Scrophulara mingpoensis* HEMSL. および *buergeriana* MIQ. ゴマノハグサの根の外観および切断面の色と極めて似ており，その隆起部のコルク層が剝離すると黄色になり，細根の残痕が節状になり，鶏脚に似ている．また *Dipsacus iaponicus* の地下部と比べると，地下部は鶏脚状と云えぬこともない．質は硬く，破折するとわずかに粉塵が飛ぶことがあり，これも上記記文とよく合致する．本草原始[36]には「一名接骨，陜蜀最勝，功能接続筋骨之断折故名続断…，市者形如玄参色黒医亦通用，状如雞脚節節断皮黄皺者及真也（一名接骨といい，河南省や四川省産のものが最も勝れており，筋骨の折傷に用いられることから続断と名づけられた…．玄市場品は参に似て色が黒く，医者もまたこれを通用し，鶏脚の如くで，節々を切断し，表面に黄色の皺があるものが真物である）」と記載され，二つの生薬図（Fig. 2）をあげているが，一つは黒い細根が多数散出している図で，一つは皺があり，細根の残痕がみられる図であるが，ともに *Dipsacus asper* WALL. の根のようである．河南省や四川省産のものが最良品とされている．また外台秘要[17]の金瘡の治療薬の一つにあげられている「続断膏」に「蜀続断」が配剤されており，すでに唐代から四川省産のものが用いられていたようである．明の万病回春[37]の「種子済陰丹」には「川続断」が配剤され，今日でも「川断」と略称し慣用されている．李時珍[11]は「今人所用以川[38]中来，色赤而瘦，折之有烟塵起者，為良焉．（今一般に用いられているものは四川省からくるもので，色は赤く瘦せており，折れば烟塵が起るものを良品としている）」と云い，同意見を述べている．本草彙言[40]にあげられている図（Fig. 4）は本草原始[36]の図の一つと近似し，*Dipsacus asper* WALL. を基源とすることを裏付けている．すなわち明代では真の続断の基源は *Dipsacus asper* WALL. であるという説が主流で定説になっていたようである．

清の植物名実図考[18]には「今滇中生一種続断，極似芥菜，亦多刺，与大薊微類．梢端夏出一苞，黒刺如毬，大如千日紅花苞，開花白，宛如葱花，茎勁，経冬不折，土医習用（今，雲南省に一種の続断が生育する．極めて芥菜に似ており，多くの刺針があり，大薊にわずかに似ている．夏に茎の先端に苞をつけ，黒刺があり毬のごとくで，大きさは千日紅花の苞ほどである．白色の花が開き，葱花のようで，茎は強く，冬になっても折れない．民間医がよく用いている．）」と詳細な記文をあげ，正確な図（Fig. 5）が画かれ，本品は明らかに *Dipsacus asper* WALL. である．

和泉屋庄次郎発行，35丁．

24) 藤原忠平ら，"延喜式"，巻37附録，日本古典全集刊行会，東京，1929，p. 107.

25) 小野蘭山口授，小野蕙敏録，井口楽三重訂，"重訂本草綱目啓蒙"，岸和田邸学蔵版，巻11，日本古典全集刊行会，東京，1928，pp. 244～245.

26) 石戸谷勉，"北支那の薬草"，同仁会発行，東京，1931，27～28.

27) T. Ishidoya, "Chinensische Drogen , II, 1937, PP, 27～28.

28) 石戸谷勉，"朝鮮薬学会会報"．第5巻，第3号，1925，p. 139.

29) 宗定哲二，薬誌，56，479 (1936).

30) 李日方等撰，"太平御覧"，第4冊，中華書局．北京，巻989，薬部6．1960，p, 4378. から引用

31) J. D. Hooker, "Flora of British India", Vol. III. K. C. S. I, London, 1882, pp. 217～218.

23) A. P. Decandole, "Prodrumus systematis Naturalis", IV, 1842, p. 646.

33) "実用中葯手冊"，商務印書館，香港，1971，pp. 369～371.

34) 劉文泰等纂，"本草品彙精要"，巻之9，上冊，

それ以後 Henry[41] により続断の基源は *Dipsacus asper* WALL. であるとはじめて学名があてられ，Stuart[44] も漢口の続断は本植物であるとした．Diels[41] は *Dipsacus chinensis* BATAL. とし，Bretschneider[45]，Stuart[44] は北京市場品の続断は *Dipsacus japonicus* MIQ. であるとした．趙燏黄[42] は祁州および北平市場品の川続断は *Dipsacus asper* WALL. を基源とするとし，*Dipsacus chinensis*（＝*D. inermis* WALL.）はみられないと云っている．

なお続断が配剤されている処方は多く，外台秘要[17] にはリュウマチ，脚気，痔疾，婦人疾患，癰疽，打撲，金瘡のほか強精強壮，発毛剤などにも配剤され，総数56処方中にみられる．宋の太平恵民和剤局方[46] には神経痛，リュウマチの治療に用いられる七聖散，換腿圓，木瓜圓，関節痛や筋骨を強化する思仙続断圓，羊肉圓，吐血や鼻からの出血の治療に用いる必勝散，婦人疾患に用いられる乾地黄圓，沢蘭圓，牡丹煎圓，琥珀圓などに配剤されている．

続断の修治法としては，雷公[3] は「採得後横切剉之，又去向裏硬筋了，用酒浸一伏時，焙乾用（採集して根を横切し，内側の硬いところを去り，丸一日酒に浸し，焙り乾して用いる）」といい，太平恵民和剤局方[46] の炮炙の項には「凡使，先剉碎，用酒浸一伏時，漉出焙乾，方入薬用，如急用，不浸亦得」とあり，急用の場合は酒に漬けなくてよいと云っている．今日でも水浸したり，鍋に入れて炒ったり，酒で炒ったりして用いる場合がある[47]．

〔III〕大薊，小薊の本草文献的考証

大薊，小薊は名医別録[3] の中品に収載され，基源に関しては陶隠居[3] は「大薊是虎薊，小薊是猫薊，葉並多刺相似．田野甚多，方薬不復用，是賤之故．大薊根甚療血亦有毒（大薊は虎薊で，小薊は猫薊のことであり，葉に多くの刺針があってともによく似ており，田野に甚だ多いもので，処方中に用いることはまれである．大薊根は甚だ血病を療し，有毒である）」と云っている．葉に刺針が多いということから *Cirsium* 属植物であろうと思われる．唐の外台秘要[17] に擴[48] の治療薬として「虎薊根，杜衡，枳根，酸棗根，（各一把），斑猫（一枚一方云三分去頭足翅熬），猫薊根（各一把），右六味擣蜜丸．日一服」というのがあり，この処方に用いられている虎薊根，猫薊根は *Cirsium* 属植物を用いるのが妥当と考える．

薊敬[3] は陶隠居[3] の説に反論し，「大小薊葉雖相似，功力有殊，並無毒，亦非虎猫薊也．大薊生山谷，根療癰腫．小薊生平沢．俱能破血，小薊不能消腫也．（大薊，小薊は葉が似ているが，効力の点で異なっている．ともに無毒のものである．虎薊や猫薊というものではない．大薊は山谷に生じ，その根は癰腫を治療するのに用いる．小薊は平沢に生じ，いずれも破血する効力があるが，小薊には消腫の効力がない）」と述べているが基源は不明である．

小薊の薬効に関しては陳蔵器[3] は「破宿血，止新血，暴下血，血痢，驚瘡出血，嘔血等，絞取汁温作煎和糖合，金瘡及蜘蛛蛇蠍毒，服之亦佳」と具体的に述べている．

薬用部分は根ばかりでなく，日華子本草[3] には小薊の地上部が用いられ，「去煩熱，生研汁服（つきくだいた汁を出し，煩熱を去るのに服する）」と記されている．また大薊は刺薊，山牛蒡とも云われ，その葉が用いられ「治腸癰，腸蔵瘀血，血運，撲損，可生研酒并小便任服，塩研嘗伝（腸癰，腹部の瘀血，産後の血病で悶える病，撲損を治療する．研ったものを酒または小便のいずれにても任意のもので服する．塩とともに研って地中に埋蔵する）」と記されている．

北宋の蘇頌[3] は小薊について「苗高尺余，葉多刺，心中出花，頭如紅藍花而青紫色．（地上部の高さが一尺余りで，葉には多くの刺針があり，中心から花が出，花は紅藍花のようで青紫色である）」と述べ，大薊については「大薊根苗与此相似，但肥大耳，而功力有殊，破血之外，亦療癰腫（根も地上部も小薊に似て

人民衛生出版社，北京，1964，p. 275

35）陳嘉謨，"図像本草蒙筌"，巻之1，金陵存義堂周如泉蔵版，31丁～32丁．

36）李中立，"本草原始"．1766年日本重刊本，続断：巻2，19～20丁．大小薊根：巻3，7～8丁，

37）龔廷賢，"万病回春"，下巻，医林書局，香港，p. 96.

38）金陵本本草綱目では「州」となっているが，頭註国訳本草綱目[39] の頭註で述べているごとく，「州」は「川」の誤りであろうと思われる．

39）白井光太郎監修，"頭註国訳本草綱目"，5冊，15巻，春陽堂，東京，1930，p. 96.

40）倪朱謨，"本草彙言"，巻之三図，1645．1丁，

41）祁州薬誌[42] および植物名彙[43] から引用，

24）趙燏黄，"祁州薬誌"，第1集，国立北平研究院生理学研究所生薬研究室，生理学研究所中文報告彙刊，1936，pp. 75～77，122.

43）松村任三，"改訂植物名彙"，前編，漢名の部，丸善，東京，1915，p. 122.

44）G. A. Stuart, "Chinese Materia Medica", Shanghai, 1911, p. 154.

45）E. Bretschneider, "Botanicon Sinicon", Part II, Shanghai, 1892, p. 162～163

46）太平恵民和剤局編，"太平恵民和剤局方"，人民

いるが，ただ肥大し．効力の点で異なっている．破血のほか，癰腫を治療する)」と述べ，小薊，大薊ともに *Cirsium* 属植物であろうと思われる．しかし証類本草にあげられた「冀州小薊根」の図（Fig. 6)は葉の刺針が不明瞭であり，蘇頌のいう小薊とは異なり，*Cirsium* 属植物とは考えられない．冀州は今の河北省，山西省および河南省の黄河以北で，遼寧省の遼河以西の地であり，しかも本図の頭状花は管状花のようでキク亜科の植物であり，総苞片が多く，葉が長円形状皮針形で，根が単一の円錐状であるので，その植物形態および分布域から *Breea setosum* (BIEB.) KITAM. (=*Cephalonoplos setosum* KITAM.[51]) エゾノキツネアザミあるいは *Breea segetum* (BUNGE) KITAM. (=*Cephalonoplos segetum* KITAM.) アレチアザミのいずれかと思われる．中葯志[6] にこの冀州小薊根の図は *Cephalonoplos setosum* に頗る似ていると記載しているが，本図に頭状花が少ないこと，葉に大鋸歯がないことからわれわれは上記二種のうち *Breea segetum* (BUNGE) KITAM. をあてるのが妥当であると考える．

本草衍義[3,63] には「大，小薊皆相似，花如髻．但大薊高三四尺，葉皺．小薊高一尺許，葉不皺，以此為異小薊山野人取為蔬，甚適用，雖有微芒，亦不能害人（大，小薊はともによく似ており，花が髻のようである．大薊は高さ三，四尺で葉に皺がある．小薊は高さ一尺許で，葉に皺がないという点で異なる．小薊は山野の人は蔬菜にして食べる．わずかに毛があるが，人には害はない）」と大，小薊の鑑別点をあげている．*Cirsium* 属植物は葉脈が明瞭で，葉肉部がわずかに隆起していることが多いので，「皺」はこれを指すものと思われ，大薊の基源は *Cirsium* 属植物であろうと考える．小薊は皺がなく，芒（毛や刺針など）がわずかであるということから *Breca* 属植物を基源とするものであろうと考える．

方書においては小薊の方が大薊よりも多く処方中に配剤されている．千金要方[02]，外台秘要[17]，太平恵民和剤局方[46] に記載された処方中には小薊根を配剤したものが十数方みられるが，大薊を配剤した処方は見あたらない．これらの処方は婦人疾患や出血性諸疾患の治療に用いられている．大薊根が配剤されている処方は北宋の蘇沈良方[54] に記載された「治嗽．并嗽血唾血．経効阿膠丸：阿膠，巻柏，乾山薬，生乾地黄．雞蘇，大薊（独根者最佳日影乾），五味子（已上各一両浄），柏子仁，茯苓，人参，百部，遠志，麦門冬，防風（已上各半両浄）．右十四味並択好薬材，依方脩製，搗羅為末，煉蜜丸如弾子大」や「治鼻衄，刺薊散：大薊根（一両），相思子（半両）右毎服一銭，水一盞，煎七分，去滓放冷服」や元の衛生宝鑑[55] の「大阿膠丸」などで，非常にわずかである．

また大薊，小薊は唐代からすでに食事療法的にも用いられていた．食療本草[56] には「小薊根，主養気．取生根葉，擣取自然汁，服一盞，立佳．又取菜煮食之，除風熱．根主崩中．又女子月候傷過，擣汁半升服之，金瘡血不止，按葉封之，夏月熱煩悶不止，擣葉取汁半升服之，立差」と記載され，医心方[57] には「孟詵云」として「葉唯堪煮羹食，甚除熱風気」とある．

明の救荒本草[58] には葉を食料にする項に「刺薊菜」や「大薊」があげられている．「刺薊菜」は「採嫩苗葉煤熟，水浸淘浄，油塩調食甚美，除風熱」と記され，また「本草名小薊，俗名青刺薊，北人呼為千針草」とあり，過去の小薊の本草記文をあげているが，図（Fig. 11）は葉にするどい刺針があり，葉は茎を抱き，開花時に根出葉が残存しており，*Cirsium japouicum* DC. に極めて近似の種である．中葯志[6] にはこの図は *Cephalonoplos setosum* 刻叶刺児菜に似ていると述べているが，共通した点がないので賛成し難い．なお「刺薊」という名称は日華子本草[3] に「大薊」の別名としてあげられ，明の証治準繩[59]には「九竅出血」の治療法として「刺薊一握絞汁酒半盞和服，如無生者搗乾者為末冷水調三銭」と記している．救荒本草の「大薊」は「今鄭州山野間亦有之．苗高三四尺茎五稜葉似大花苦苣菜，葉茎俱多刺其葉多皺，葉中心開淡紫花（河南省鄭県の山野にこれがある．地上部の高さは三四尺で茎は五稜があり，葉は大花苦苣菜に似，葉茎ともに多くの刺針があり，葉は多くの皺がある．葉の中心から淡紫色の花が開くと記され，図(Fig. 11）は葉が長楕円状皮針形で鈍頭，鋸歯があり，葉縁には刺針がある．頭状花は多数で，茎には刺針のある翼があり，*Carduus crispus* L. ヒレアザミに完全に

衛生出版社，北京，1959，pp. 16, 22, 25, 93, 102, 106, 144, 160～162, 175, 220.

47) 衛生部中医研究院中葯研究所，衛生部葯品生物製品検定所合編，"中葯炮炙経験集成"，人民衛生出版社，北京，1965，pp. 105～106.

48) 諸病源候論[49] によれば種々の原因により起る頸部の腫れものであると記している．西山英雄[50] は「頸の腫れる病，久しく癒えざる瘡，鼠瘻の如く穴を穿っもの」と云っている．

49) 巣元方，"巣氏諸病源候総論"，巻 **34**，国立中国医薬研究所出版，台北，1953，p. 1.

50) 西山英雄，"漢方医語辞典"，改訂再版，1971. p. 346.

合致する．

明の本草原始[36]には「出北地薊門者勝，花紅如髻，但大薊高三四尺葉皺，小薊高一尺許葉多刺不皺野人呼為千針草（河北省宛平縣の北部に産するものがすぐれている．花は紅色で髻の如くである．大薊は高さ三，四尺で葉に皺があり，小薊は高さ一尺許りで葉に多くの刺針があり，皺がない．一般の人は千針草と呼んでいる）」とあり，本草衍義[3]に似た記文をあげ，Fig. 7 の図が記されている．大薊の図は救荒本草[58]の刺薊菜の図（Fig. 11）に似たもので，葉が羽状深裂し，鋸歯がみられ，開花時に根出葉が残存していることから *Cirsium japonicum* DC. に近似のものであろうと思われる．また小薊の図は葉が全縁で，刺針があり，根茎がなく，根が細く単一円柱状であることから *Breea segetum* (BUNGE) KITAM. であろうと思われる．

明の三才図会[60]には小薊があげられ，図（Fig. 10）は明らかに *Cirsium* 属植物であり，葉が細く，輪状にはえていることから中国各地で最も普通にみられる「輪薊 *Cirsinm lineare* (THUNB) SCHULTZ BIPONT. var. *franchetii f. pallidum* KITAM.（=*Cirsium chinense* GARDN. et CHAMP.）あるいは *C. lineare var. laushanense* KITAM.，——*f. vestitum* KITAM.（=*C. chinense* HAYATA）のいずれかであろうと思われる．今日，広西省では輪薊の根部を小薊として用いている[6]

本草綱目[11]では李時珍は大，小薊の基源について論述していないが，附図（Fig. 8）から考えて，大薊は *Cirsium* 属植物であり，小薊は *Breea* 属植物であると推定する．

清代でもなお大薊，小薊の基源については多くの説がある．本草彙言[40]の「大小薊」の2種の図（Fig. 9）はともに *Breea segetum* (BUNGE) KITAM. であろうと思われる．植物名実図考[18]ではまた違った意見が述べられている．小薊に関しては救荒本草[58]の記文を引用しているが，図（Fig. 12-A）は救荒本草の刺薊菜の図と非常に異っている．この図について牧野[61]はヒレアザミ *Carduus crispus* L. であると云い，確かにそのようでもあるが，植物名実図考[18]には *Carduus* 属植物を基源とするものに「飛廉」をあげており[1]，本書の小薊の図は茎に翼がなく，刺針のみであることから *Cirsium* 属植物をあてるのが妥当であると考える．大薊に関しては2種の図（Fig. 12-B, C）があげられ，Fig. 12-B の図は救荒本草[58]の刺薊菜の図と似ており，*Cirsium japonicum* DC. に近似した植物を示している．Fig. 12-C の図は前述したごとく同書の続断の図と同じく，*Dipsacus asper* WALL. であろうと考える．

このように時代差や地域差により，大薊，小薊の名称が混乱し，多種類のものが使われていた．近年，謝宗万[62]は正常品の大薊は *Cirsium japonicum* DC. で，小薊は *Breea segetum* (BUNGE) KITAM. であるとしているが，市場では大薊と小薊とは異物同名品が甚だ多く，江西，湖北，東北地方などでは *Cirsium japonicum* DC. を小薊と云い，*Breea segetum* (BUNGE) KITAM. を大薊と呼んでいる．また大薊と小薊とを区別せずに大小薊と呼んだり[63]，全草を用いる地域もあれば根のみを用いる地域もあり，極めて混乱していると論述している．そこで中葯志[6]，中国薬用植物誌[64]，中葯材品種論述[62]，江蘇省植物薬材誌[64]，東北薬用植物誌[66]，浙江民間常用草葯[67]，河北中葯手冊[68]，広西中草葯[69]，北方常用中草葯手冊[70]，陝西中草葯[71]などに記載されている大薊，小薊をまとめてみると TABLE. 1 のごとくになる．

大薊の正常品に関して中葯志[6]や謝宗万[62]などは *Cirsium japonicum* DC. であるとしており，本草文献的にも真の大薊は本種に近縁の植物をあてるのが妥当と考える．しかし *Cirsium japonicum* DC. は中国

51) 従来 *Cephalonoplos* 属に分類されていたが，この学名は無効になり，*Breea* 属が正名となっている[52]ので，以下本学名を採用する．

52) S. KITAMURA, Acta Phytotax. Geobot., **8**, No. 2～3, 79 (1956)
53) 寇宗奭撰，"本草衍義"，10巻，商務印書館，上海，1937，p. 59.
54) 蘇軾，沈括，"蘇沈良方"．巻5．人民衛生出版社影印，北京，1956，p. 53．および巻7，p. 73.
55) 羅天益，"衛生宝鑑"，巻12，人民衛生出版社，北京，1963，p. 116.
56) 中尾万三，上海自然科学研究所彙報，第1巻，第3号，87，(1930)．"食療本草の考察"，
57) 丹波康頼撰，"医心方" 巻30，浅倉屋蔵版，人民衛生出版社，北京，1955，p. 708.
58) 朱橚編輯，"救荒本草"，上巻，草部，明嘉靖四年（1586年）刊本，1～2丁．
59) 正肯堂，"証治準繩"，第3冊，明万歴30年（1602年）刊，69丁．
60) 王圻纂輯，"三才図会"，巻之草木三，明，万歴35年（1607年）刊本，成文出版社，台北，1960，p. 2361.
61) 白井光太郎監修，"頭註国訳本草綱目"，第5冊．春陽堂，東京，1930，p. 129．での考定者，牧野富太郎博士の意見．
62) 謝宗万，"中葯材品種論述"，上冊，上海科学技術出版社，上海，1964，pp. 337～340.

に分布せず[16]，中葯志[6]や謝宗万[62]などが云う大薊の正常品は本種の変種かあるいはまったく別種であろうと推定する．中葯志[6]は Fig. 13 の図をあげ，*Cirsium japonicum* DC. の学名をあたえているが，この図は総苞片が4列，葉の裏面に密に毛があり，根茎が極めて小さい点から本種とは考え難い．中国における *Cirsium* 属植物の調査は不充分で，今だ完全な分類研究がなされておらず，今後の研究により明確にされれば本種が決定されるであろう．

小薊の正常品に関して中葯志[6]や謝宗万[62]などは *Breea segetum* (BUNGE) KITAM. (=*Cephalonoplos segetum* KITAM.) であるとしている．確かに本草文献的に過去に用いられた小薊は大部分 *Breea* 属植物であろうと思われれるが，陶隠居[3]や蘇頌[3]のいう小薊および三才図会[60]や植物名実図考[18]の小薊は *Cirsium* 属植物と考えられ，また小薊は大薊と基源植物，薬効その他の面で少なからず混乱がみられる．

最近，常用中草葯手冊[72]には「大薊，小薊の治療効果は基本的に同一であり，とくに瘡腫には多く大薊 (*Cirsium japonicum* DC.) を用い，肝炎には小薊 (*Breea segetum* (BUNGE) KITAM.) を用いる」と記載されており，大薊，小薊に関しては今後過去の記文にあまりとらわれず，基源植物と薬効が明確にされたものを使用する必要があろう．

結論

古来続断は異物同名の同効薬物が数種みられるが，真の続断は *Dipsacaceae* の *Dipsacus asper* WALL. の根を基源とするものである．

続断の効用と類似した大薊，小薊に関しては各時代差，各地域差により極めて混乱しているが，*Cirsium* 属あるいはその近縁の *Breea* 属植物を用いれば出血性諸疾患など本来の薬効が期待できるであろう．しかし過去の記文にとらわれず基源と薬効を科学的に明確にし，今後新しい薬物として考慮する必要があろう．

謝辞

本研究にあたり，文献閲覧の御便宜を与えて下された武田薬品工業株式会社宮下三郎博士に深謝する．

63) われわれの調査（未発表）でも香港，台湾では *Cirsium* 属植物を基源とするものが「大小薊」という名称で市販されている．
64) 裴鑑ら，"中国薬用植物誌"，4冊：196図，5冊：248図，科学出版社，北京，1955.
65) 中国科学院植物研究所南京中山植物園薬用植物組編，"江蘇省植物薬材誌"，科学出版社，北京，1959，pp. 509～513.
66) 劉慎諤，"東北薬用植物誌"，科学出版社，北京，1959，pp. 202，203，208.
67) 浙江省革命委員会生産指揮組衛生局主編，"浙江民間常用草葯"，第2集，浙江人民出版社，浙江，1970，pp. 180，181.
68) 河北省革命委員会商業局医葯供応站等編，"河北中葯手冊"，科学出版社，北京，1970，pp. 248～252
69) 広西壮族自治区革命委員会衛生管理服務站編，"広西中草葯"，広西人民衛生出版社，広西，1970，pp. 256～257.
70) 北京，沈陽，蘭州，新疆部隊后勤部衛生部合編 "北方常用中草葯手冊"，人民衛生出版社，北京，1971，pp. 556～557.
71) 陝西省革命委員会衛生局，商業局編，"陝西中草葯"，科学出版社，北京，1971，pp. 694～697.
72) 広州部隊后勤部衛生部編，"常用中草葯手冊"，人民衛生出版社，北京，1969，pp. 400～403.

A

Fig. 1

B

C

大 観 本 草　　政 和 本 草　　紹 興 本 草

Fig. 2 本草原始

Fig. 3 本草綱目

Fig. 4 本草彙言

Fig. 5 植物名実図考

Fig. 6

大観本草

政和本草

紹興本草

Fig. 7　本草原始

Fig. 8　本草綱目

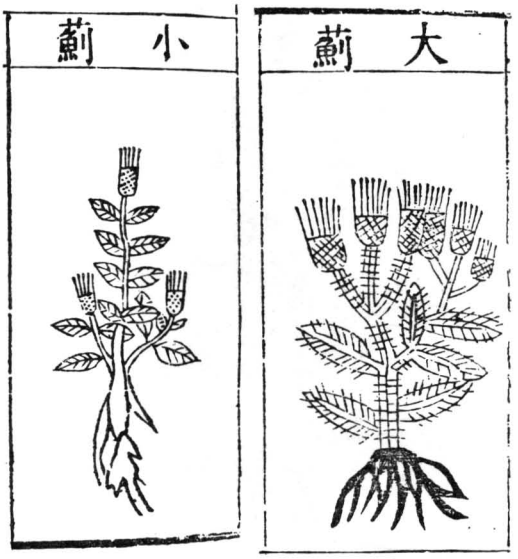

Fig. 9 本草彙言

Fig. 10 三才図会

Fig. 11 救荒本草

Fig. 12 植物名実図考

A. 小 薊

B. 大 薊 (一)

C. 大 薊 (二)

Fig. 13 中葯志[6]) にあげられている大薊

TABLE 1. 現在中国で用いられている大薊，小薊の基源

生薬名	中国植物名	学　　名	薬用部分	使　用　場　所
大薊	薊	*Cirsium japonicum* DC. (?)	全草	遼寧鳳城，北陵，山東青島安徽翕羽，江蘇，四川，浙江，陝西
			根	広東，広西，貴州，江西南昌
	刺児菜	*Breea segetum* (BUNGE.) KITAM. (=*Cephalonoplos segetum*)	全草	吉林九台，洮南，東北，河北承徳，北京，江蘇清江
	刻葉刺児菜	*Breea setosum* (BIEB.) KITAM. (=*Cephalonoplos setosum*)	全草	東北，吉林，河北，陝西平利
	飛　廉	*Carduus crispus* L.	全草	江蘇徐州，青海
	香　薊	*Cirsium euosmos* W. W. SM. et FORR.	全草	青海
	青刺薊	*Cirsium chlorolepis* PETRAK.	根	雲南
	烟管薊	*Cirsium pendulum* FISCHER ex DC.		東北，河北
	馬刺薊	*Cirsium chinensis* var. *austril* DIELS		陝西太白山
	大青青菜	*Cirsium ruthans* L.		山東
	羽苞薊	*Cirsium pinnatibrateatum* LING		陝西
	大牛喳口穂大薊	*Cirsium spicatum* MATSUM.	根	貴州
	草大薊	*Cirsium pratense* DC.		華南
	魁　薊	*Cirsium leo* NAKAI et KITAG.		東北
	野　薊	*Cirsium maackii* MAXIM.		四川
小薊	刺児菜	*Breea segetum* (BUNGE.) KITAM.	全草	河北，山東，安徽，江蘇，湖南，四川，陝西，甘粛
			茎，根茎	青海
	刻刺児菜	*Breea setosum* (BIEB.) KITAM.	全草	河北，陝西利平，甘粛，湖南
	薊	*Cirsium japonicum* DC. (?)	根	湖北利川，江西南昌
	輪薊（華薊）	*Cirsium lineare* var. *franchetii f. pallidum* KITAM. (=*Cirsium chinense* GARDN. et CHAMP.)	根	広西
	野　薊	*Cirsium maackii* MAXIM.		河北安国
	細葉薊	*Cirsium lineare* SCHULTZ. et BIPONT.		四川
	新疆小薊	*Cirsium* sp.	全草	新疆
	苣賈菜	*Sonchus brachyotus* DC.	全草	東北，河北安国，天津
	苦　菜	*Ixeris versicolor* DC.	全草	吉林九台
	変色苦菜	*Ixeris chinensis* subsp. *versicolor* KITAM.		吉林

茶の薬用について

赤 松 金 芳*

KANEYOSHI AKAMATSU : On the Application for Medicinal Purposes of the Tea.
A brief note on the History of TEA, and comparative study with followiug publications about the Medicinal Use of TEA.
「喫茶養生記」Kissa Yôjôki (1211 : 1214) by 栄西 Yôsai in contrast to「新修本草」Shiushu Honzô (657) in 唐 Tô era,「万安方」Mannanmhô by 梶原性全 Kajiwara Seizen to「証類本草」Shôrui Honzô (1108 : 1116) in 宋 Sô era, and「茶茗能記」Chamei Nôki (1805) by 翠中軒知新 Suichuken Chishin to「本草綱目」Honzô Kômoku (1590) in 明 Min era.

茶は，南部アジアの原産で，インド，中国，日本にも自生していたといわれる。

中国では，すでに周（BC800～600）のころから知られていたというが，飲料としたのは漢代（BC 206～AD1）のころで，現在の四川省附近の地方習俗として用いられた。魏（220～260）の華陀の「食論」の中に，茶のことを論じているが，唐（618～909）代では，陸羽が「茶経」3巻を著わして玄宗に献じた。また宋（960～1126）のころには，祭襄の「茶録」，蘇軾の「茶説」，毛文錫の「茶譜」などが著わされて，唐宋の時代では，茶は嗜好用としても，一般に普及し，従って，その栽培も盛んとなり，団茶・粉茶などが製造されるようになった。

日本でも，自生茶があったようであるが，奈良朝時代，天平年間（729～748），聖武天皇が「般若経」を講ぜられたとき，百僧を禁廷に召して「行茶儀」が行われたということが，「奥義抄」に記されてあり，また，僧行基（668～749）が，諸国に堂舎を建てたとき，茶の木を栽えたとのことが「東大寺要録」に載っているが，これらは，自生茶であったか，あるいは中国から伝えられたものであるかは，明らかでない。

また，桓武天皇の延暦24年（805）に僧最澄が，唐から茶の種子を携えて帰り，比叡山麓に栽えたということが「日吉神道秘密記」に見えている。

そして，「日本後紀」によると，嵯峨天皇が弘仁6年（815）4月，近江国滋賀韓崎に行幸されたとき，梵釈寺で大僧都永忠が自から茶を煎じて奉ったといい，同じく6月には，畿内および近江・丹波・播磨の諸国に令して茶を栽えて，毎年これを献ぜしめるという記載もある。

また，延喜2年（901）に醍醐天皇が仁和寺へ行幸されたとき，宇多法皇が茶の饗宴をされたことが「花鳥余情」に見え，あるいは，村上天皇の天暦年間（947～951）に悪疫が流行したとき，空也上人が患者に茶を施こして効があったという伝説がある。

そして，深江輔仁の「本草和名」（918）には，『茗，苦樣』の名が見えるが，和名は記されていない。これは，唐の「新修本草」に載せられた名前を，そのまま引用したものである。また，源順の「和名類聚鈔」には『茶茗』として『爾雅注にいう，茶は小樹にして支子に似，その葉は煮て飲となすべし』とあるが，これも「新修本草」の注によったものである。

以上のように，平安朝時代に，茶が飲用または薬用に供せられたようであるが，その後一旦中絶していたらしく，現在，我々が飲用している茶は，鎌倉時代になり，僧栄西（1141～1215）が，宋から帰朝のとき，茶の種子を持って帰った。ところで，その時期について2説がある。それた仁安3年（1168）すなわち最初の入宋のとき持ち帰ったという説と，建久2年(1191)再度入宋して帰朝したとき持ち帰ったという説とがある。いずれにしても，持ち帰った茶の種子を，肥前の平戸，筑前の背振山に栽えたといい，また，その茶種子の一部を，僧高弁（明恵上人）に贈ったのを，建保元年（1217）栂尾の深瀬に栽え，同5年これを宇治に分栽し，それから全国に茶園ができた。また，栄西に師事した聖一国師は，その郷里の静岡で茶の栽培を奨励したという。

ところで「吾妻鏡」巻22，建保2年（1214）2月4日の条に

将軍家聊御病悩，諸人奔走，但無殊御事，是若去

* 京浜女子大学教授，Adress : 10-18 yukinoshita. 1-chome, Kamakura-shi, Japan,

夜御淵酔余気敷，爰葉上僧正候御加持之処，聞此事，称良薬，自本寺，召進茶一盞，而相副一巻書，令献之，所誉茶徳之書也，将軍家及御感悦，云云

〔去月之比坐禅余暇書出此抄之由申之〕

とあり，源実朝が病気になり，それが宿酔であったので，栄西（葉上僧正）が良薬と称して茶一盞を進め，且つ，茶の徳を誉めるところの書を献じたことが記されている。この書が「喫茶養生記」で，その初治本は，承元5年（1211）にでき，そして現在市販されている再治本の序文には，建保2年正月となっている。

この「喫茶養生記」の序文には

茶者養生之仙薬也，延齢之妙術也，山谷生之，其地神霊也，人倫採之，其人長命也

とあり，本書は，上下2巻より成り，上巻は『五臓和合門』として，茶の名称，形容，功能，採時，及び調製などにつき記し，下巻は『遣除鬼魅門』として，飲水病，中風，不食病，瘡病，脚気病などの養生法につき記されている。

そして，その『五臓和合門』では「尊勝陀羅尼破地獄法秘鈔」を引いて『肝臓は酸味を好む，肺臓は辛味を好む，心臓は苦味を好む，脾臓は甘味を好む，腎臓は鹹味を好む』とし，更に之を五行，五方，季節，五色，五識，五感等に充てる。

五臓	五味	五行	五方	季　節	五色	五識	五感
肝	酸	木	東	春	青	魂	眼
肺	辛	金	西	秋	白	魄	鼻
心	苦	火	南	夏	赤	神	舌
脾	甘	土	中	四季末	黄	志	口
腎	鹹	水	北	冬	黒	相	耳

これらは，中国における陰陽五行説に基ずくものであるが，本書によれば，茶は苦味の最上のもので『茶を喫すれば心臓を強くして病なし』といい，また『もし人，心神，不快の時は，必ず茶を喫すべし，心臓を調えて万病を愈す』という。これは茶が苦味であるということによって心臓を強くするというのであって，もとより栄西は，カフェインの強心作用というようなことは知っていなかったが，まことに偶然の一致ともいえよう。

更に，茶の功能として，諸書を引用して述べてある。すなわち

広雅曰，其飲茶，醒酒，令人不眠。

博物志曰，飲真茶，令少眠。

神農食経曰，茶茗宜久服，令人有悦志。

本草（すなわち新修本草）曰，茶味甘苦微寒無毒，服即無瘻瘡也．小便利，睡少，去疾（痰？）渇，消宿食。

華佗食論曰，茶久食則益意思，身心無病。

壺居士食志曰，茶久服羽化。

陶弘景新録曰，喫茶，軽身，換骨苦。（骨苦即脚気也）。

桐君録曰，茶煎飲，令人不眠。

杜育荈賦曰，茶調神，和内，倦懈康除。

本草拾遺曰，皐盧苦平，作飲止渇，除疫，不眠，利水道，明目，出南海諸山，南人極重，除温疫病也。

など，その功能を述べてあるが，これらの中には，カフェインの利尿，興奮作用を示すと思われるものも見える。

そして，ここにいう本草は，唐の蘇敬の「新修本草」（657）で，その巻13の木部中品に，『新附』として

茗苦槤，茗味甘苦微寒無毒，主瘻瘡，利小便，去痰熱渇，令人少睡，春採之

苦槤，主下気，消宿食，作飲加茱萸葱薑等良。

按，爾雅釈木云，檟苦槤注，樹小，似梔子，冬生葉，可煮作羹飲，今呼早採者為槤，晩取者為茗，一名荈，蜀人名之，苦茶生山南金州梁州漢中山谷。

との記載があり，これより引用するとともに同じく唐の陳蔵器の「本草拾遺」（739）からも引用しているが，宋の「証類本草」の影響はまだ現われていない。

宋の唐慎微の「証類本草」（1108：1116）では，第13巻に，上記の「新修本草」の記載の外に，

陳蔵器本草云，茗苦茶，寒，破熱気，除瘴気，利大小腸。

食療云，茗葉，利大腸，去熱，解痰……

茶主下気，除好睡，消宿食。

外台秘要，治卒頭痛。

食医心鏡，主赤白痢及熱毒痢……主気壅，暨腰痛，転筋不得。

経験方，治陰嚢上瘡。

兵部手集，治心痛不可忍十年五年者。

勝金方，治躍蠼尿人成瘡。

などの功能が記載されている。

そして，「喫茶養生記」より約100年後の，同じ鎌倉時代，梶原性全の「万安方」（1315），巻61の「照味鏡」上巻には，この「証類本草」の記載を，ほとんど，そのまま引用してある。（但し，「外台秘要」の治卒頭痛

と，「勝金方」の「蠼螋尿瘡」の項は脱けている)。

ところが，明の李時珍の「本草綱目」(1590)の第32巻には，まず，

〔主治〕瘻瘡，利小便，去痰熱，止渇，令人少睡，有力悦志〔神農食経〕

と記載しているが，これは，〔神農食経〕の『有力悦志』の外に，「新修本草」および「証類本草」の『瘻瘡，利小便，去痰熱渇，令人少睡』をも「神農食経」の記載としている。そして『下気，消食』のみを蘇恭(即ち「新修本草」)の記載として引用している。その他

陳蔵器の　破熱気，除瘴気，利大小腸。
王好古の　清頭目，治中風昏憒，多睡不醒。
陳承の　治傷暑，泄痢。
呉瑞の　治熱毒赤白痢。
李時珍の　吐風熱痰涎。

を〔主治〕とし，その〔附方〕には

医方大成の　気虚頭痛。
孟詵の　赤白下痢。
普済方の　大便下血。
郭稽中婦人方の　産後秘塞。
兵部手集の　久年心痛。
孟詵食療の　腰痛難転。
簡便方の　解諸中毒。
(引用方名不記)の　痘瘡作痒。
経験方の　陰極生瘡。
摂生方の　脚極湿爛。
勝金方の　蠼螋尿瘡。
摘玄方の　風痰顚疾。
聖済総録の　霍乱煩悶。
鮑氏の　月水不通。
瑞竹堂方の　痰咳欬嗽。

などが挙げられている。

これに対して，江戸時代，享和3年(1803)翠中軒知新によって著わされた「茶茗功能記」がある。これは，乾坤の2部より成り，全部寫本である。

著者は，序文には，『翠中軒知新』とあり，題辞には『知新庵又新』とし，また，本書最後の自跋には『知新庵阿耨房』の署名がある。何れも同人異名で『阿耨房』とあるから，多分，僧侶であろうと推察する。

そして，本文は，平仮名交り文で，最初に，

『本草綱目に曰く，神農食経に曰く，茶茗よろしく久服すべし，力あらしめ志悦。

△弁に云く，神農食経の書，今はなし，本草綱目にかくのごとくあり云云』

というように，知新は，李時珍の「本草綱目」に「神食農経」として引用した中の『有力悦志』だけを取り挙げて，他の「新修本草」の記載は除いている。その他は，主として「本草綱目」の記載により，

中風昏憒多眩(睡？)不醒を治す。
大小腸を利す。
頭目を治す。
傷暑霍乱泄利を治す。
風熱痰涎を吐くを治す。
気虚の頭痛を治す。
熱毒下利，大便下血，産後秘塞，久年の心病を治す。
諸中毒を解す。
痘瘡痒きを治す。
陰嚢瘡を生ずるを治す。
脚極湿爛，抹茶を附け治す。
月水不通を治す。
痰喘欬嗽を治す。

などの功能を挙げてある。(但し，孟詵食療の腰痛難転，勝金方の蠼螋尿瘡，摘玄方の風痰顚疾，聖済総録の霍乱煩悶は除く)

また，「喫茶養生記」からは

意志を益し，心身病無し。〔華陀〕。
羽翼を生ず。
眠多きを治す。〔博物志〕。
神を調え，内を和し，倦懈除き易し。〔茸賦〕

を引用するほか，本書独自の功能として，

痔瘡を生ぜず，痔瘻の憂なし。(これは新修本草の瘻瘡によるか？)
黄疸を発せず。
頭瘡，面瘡，汗痘を治す。
口舌牙歯痛を治す。
頭脳鳴響を治す。
大白蟻を治す。(この注によると，『初め，物音を嫌い，鳴り響くを忌むこと，日に増し；少しの音ほど，いやがる思い苦しく云云』とあり。一種の神経性疾患のようでもある)
肺癰，気腫，痰腫，癰疔を治す。
衄血，吐血，痰血，嘔血を治す。
嘔吐，飜胃，膈症を治す。
酒鼻，瘻瘡を治す。(但し瘻瘡は「新修本草」所載)
脚気を治す。(「喫茶養生記」には骨苦を脚気とする)

などが挙げられている。

以上，茶の功能を説いているが，その多くは，カフェインの中枢興奮・利尿作用，テオフィリンの利尿作用や，フラボノイド，タンニンなどの収斂・止血作用，あるいは，サポニンの去痰作用，またはビタミンC作用などの諸作用によると思われるものが少なくないようである。

ところで，これらの茶の効用を説くとともに，その害の方面についても説くものがある。

すでに，唐の孫思邈の「千金方」(652) に

『黄帝云，不可共韭食，令人身重』

といい，韭と共に食することを禁じている。

また「証類本草」にも

陳蔵器本草云……食之宜熱，冷即聚痰。

といい，あるいは

図経曰……飲茶少則睡神思，過多則致疾病。

ともいう。

そして「本草綱目」では

蔵器曰，苦寒，久食令人瘦，去人脂，使人不睡，飲之宜熱，冷則聚痰。

胡洽曰，与榧同食，令人身重。

李廷飛曰，大渇及酒後飲茶水，入腎経，令人腰脚膀胱冷痛，兼患水腫攣痺諸疾，大抵飲茶宜熱宜少，不飲尤佳，空服最忌之。

時珍曰，服威霊仙，土茯苓者，忌飲茶，

などといっている。これらによると，『熱い茶はよいが，冷たい茶はよくない』とか，『久食』または『過多』はよくないといっている。また，江戸時代の名古屋玄医の「閲甫食物本草」(1671) にも，上記の説を引用するほかに，

若少壮胃健之人……温飲則火因寒気而下降，熱飲則茶借火気而升散，又兼解酒食之毒，使人神思爽，不昏不睡，此茶之功也

若虚寒及血弱之人，飲之既久則脾胃悪寒，元気暗損……成痰飲，成痞脹，成痿痺，成黄瘦，成嘔逆，成洞瀉，成腹痛，成疝瘕，種々内傷，此茶之害也……

といい，これは体質によって害があるというのである。

茶葉中には，その品質による差異はあるがカフェインを1～5％含んでいる。それで，そのカフェインをそれで，そのカフェインを連用すると習慣性があり，大量用いると，もちろん中毒作用を呈することは周知の通りであり，また，過敏性体質の人は，小量でも，時には有害作用を示すこともある。ここにいう「閲甫食物本草」は，それを指すものと思われる。

これに対して「茶茗功能記」では

本草家時珍，茶を毒なりと云えども，百能のうち，一二を禁ずるのみ也。茶嫌らいの人，この説になづんで，百毒もあるように思うは誤り也。元来，時珍は茶嫌らいにて，忌むこと甚だし。人々の禁好うまれつきに任せて，しゆべからず。時珍が説に因って，貝原氏，和漢事始にも甚だ悪しく書きたれども，世上一般に茶を飲むことなれば，是非を論じ得たる説にてもなし。……茶の悪説をいう事は，茶に似せ物ありて，交ぜ茶を商ない，或は出地場所あしきものは薬にならぬという義也……上茶を飲むには，毒ということ有るべからず……

とて，茶の有害説を否定して，極力，その功能を強調している。

以上，茶の薬用につき，唐の「新修本草」に対する栄西の「喫茶養生記」，宋の「証類本草」に対する梶原性全の「万安方」，明の「本草綱目」に対する翠中軒知新の「茶茗功能記」の記載につき，それぞれ比較考察を加えたのであるが，それらの薬効を，その成分および薬理作用につき現代の医薬学上より見て，適当であると思われるものも少なくないことは，誠に興味があり，また意義深いものがある。

〔会務報告〕

日本薬学会第92年会は，昭和47年4月5，6，7の3日間にわたり，近畿大学を会場として開催されたが，薬史学部会は，7日R会場で，下記報告ならびに特別講演を行なった．

（報　告）

○調剤法，機器の改良について，（阪大病院）
（大阪薬大）中室嘉祐，（阪大病院）福島広利・松井　進

○大病院方函について
（明治薬大）　佐藤　交比古

○教科書から見た明治初期薬学教育
（東京薬大）　川瀬　　清

○茶の薬用と翠中軒知新著「茶茗功能記」
（京浜女子大）　赤松　金芳

○緒方洪庵をめぐる薬学ゆかりの人びと
（薬史学会）　根本　曽代子

○「日本薬園史」の著者　上田三平伝
（山之内製薬・中研）　三浦　三郎

Establ. 1870

HEIANDOO PHARMACY

5-78 Aioityoo, Nakaku, Yokohama, Japan.

Tel. Yokohama : 045-681-3232 ; 3233.

Dr. TOOTAROO SIMIZU, Pharmacist.

Professer of Pharmacy TOHO UNIVERCITY, Tokyo

Member of THE JAPANESE SOCIETY OF HISTORY OF PHARMACY, Tokyo.

Member of L'ACADEMIE INTERNATIONALE D'HISTOIRE DE LA PHARMACIE. Pays Bas.

Member of Internationale Gesellschaft für Geschichte der Phamazie e. V., Stuttgart.

Member of the American Institute of the History of Pharmacy, Madison.

HUZIO SIMIZU, Chief Pharmacist.

創 業 明 治 3 年

平 安 堂 薬 局

横浜市中区相生町5-78（馬車道）

電 話 (045)-681-3232, 3233

東邦大学名与教授　薬学博士　清 水 藤太郎

薬 局 長　薬剤師　清 水 不二夫

（特別講演）

○道修町を中心とする大阪の薬業について
（大阪大学名誉教授）　宮本　又次

○国際薬史学会コングレスに出席して
（東邦大学薬学部）　清水　藤太郎

◇

なお，午後の部開会に先だち，46年度庶務会計報告を行なうに当り，多年経理担当として尽した幹事赤須通美氏の急逝に対し弔意を表した．

（会計報告）

46 年 度 決 算

（収入）		443,585（単位円）
繰越金		11,283
会費	賛助会員	10,000
	一般会員	58,000
	学生会員	500
広告料		55,000
雑誌売上代		3,600
寄附		12,500
利子		340
借入金		292,362
（支出）		416,742
郵送料		11,945
事務費		535
印刷費		304,262（薬史学雑誌 Vol. 5 No. 2 他）
返済金		100,000
残金		26,843（次年度繰越）

日本薬史学会会則

第1条　本会は日本薬史学会 The Japanese Society of History of Pharmacy と名付ける.

第2条　本会は薬学，薬業に関する歴史の調査研究を行い，薬学の進歩発達に寄与することを目的とする.

第3条　本会の目的を達成するために次の事業を行う.

1. 総会（毎年日本薬学会年会の時に行う）
2. 例会（研究発表会，集談会）
3. 講演会，シンポジウム，ゼミナール，その他
4. 機関誌「薬史学雑誌」の発行. 当分の間年2回とする.
5. 資料の収集，資料目録の作製.
6. 薬史学教育の指導ならびに普及.
7. その他必要と認める事業.

第4条　本会の事業目的に賛成し，その目的の達成に協力しようとする人をもって会員とする.

第5条　本会の会員は会費として年額1,000円を前納しなければならない. 但し学生は年額500円とする. 賛助会員は本会の事業を協賛する人または団体とする. 賛助会員は年額5,000円とする.

第6条　本会に次の役員をおく. 会長1名，幹事若干名，評議員若干名，役員の任期は2カ年とし重任することを認める.

1. 会長は総会で会員の互選によって選び，本会を代表し会務を総理する.
2. 幹事は総会で会員の互選によって選び，会長を補佐して会務を担当する.
3. 幹事中若干名を常任幹事とし，日常の会務および緊急事項の処理ならびに経理事務を担当する.
4. 評議員は会長の推薦による.

第7条　本会に事務担当者若干名をおく. 運営委員会は会長これを委嘱し，常任幹事の指示を受けて日常の事務をとる.

第8条　本会の事業目的を達成するため別に臨時委員を委嘱することができる.

第9条　本会は会長の承認により支部又は部会を設けることができる.

第10条　本会の会則を改正するには総会で出席者の過半数以上の決議によるものとする.

第11条　本会の年度は暦年（1月より12月まで）とする.

第12条　本会の事務所は東京都千代田区神田駿河台日本大学理工学部薬学科内におく.

日本薬史学会役員（昭和47年10月現在）

○印は常任幹事

会長	朝比奈泰彦	
幹事	長沢　元夫	三浦　三郎
	滝戸　道夫	川瀬　　清
	○木村雄四郎	○吉井千代田
	清水藤太郎	
（地方）	難波　恒雄	塚本　赴夫
	宗田　　一	

健保適用

●去痰にキモプシン バッカル

閉塞性肺疾患の
気管支拡張と排痰に

持続性と経口効力に優れる

気管支拡張剤

アストーン錠

Asthone

Clorprenaline

気管支喘息・慢性気管支炎・慢性肺気腫などの閉塞性肺疾患の治療では、気管支筋の拡張と痰の排除に気管支拡張剤——アストーン——が大切な役割をはたします。

特　長

本剤の作用は6－8時間持続する。
腸管吸収が良く経口効力に優れる。
夜間、明け方の症状改善に好適である。
気管支筋攣縮物質の遊離抑制作用がある。

適　応

気管支喘息、慢性気管支炎、喘息性気管支炎、小児喘息、慢性肺気腫、肺線維症、塵肺

包装・健保薬価

100錠(10×10)、1000錠(10×100)、1錠12.60円

使用上の注意　本剤の投与により、一過性の動悸・手の振顫・頭痛を訴えることがあるので「能書の用法・用量、使用上の注意」を熟読のうえお使い下さい。

Eisai

エーザイ
東京都文京区小石川4